（様式４）

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和　４年　３月３１日

グループ名	南中野道徳授業研究会	フリガナ 代表者氏名	マツイ　サトシ 松　井　敏
学校名 （代表者）	中野区立南台小学校	電話番号	０３－３３８１－７２５７
研究テーマ	児童の問題意識を高める道徳授業の工夫改善		
研究期間	令和　３年　４月　１日　から　令和　４年　３月３１日　まで		

研究結果の概要

※詳細は別紙により報告

研究テーマ：「児童の問題意識を高める道徳授業の工夫改善」
研究の目的：道徳授業にかかわる授業力向上
　　研究内容を在籍校地域や中野区内の教員に還元
研究方法：①基礎研究（先行研究，先行実践をもとにした研究主題についての理論構成）
　　②授業実践（指導法の開発，理論の検証，考察）
　　③道徳談義
　　（研究同人による道徳授業，道徳教育に関する思いや願いの共有）
　　④報告（紙上発表）

道徳授業における「児童の問題意識」を児童が様々なことを「自分のこととして考える思考」ととらえている。例えば,「道徳の授業を楽しみにしている」,「道徳授業で扱う教材の人物に自分を重ねて考えている」,「自己の生活場面を思い浮かべて考えている」,「自分と関わりのある社会について考えている」等の児童の姿である。

本年度のテーマを「児童の問題意識を高める道徳授業の工夫改善」とした。道徳授業の特質を踏まえたよりよい授業への工夫改善のために，児童の問題意識を高め，それを生かしていくには，どのような学習指導過程，教材，指導法の工夫が考えられるか実践を通して検討していく。検証に当たっては，問題意識を高め，考えた児童の姿を具体的に捉えながら，道徳授業のねらい達成を前提に指導法の有効性を検討しながら研究を進めた。

児童の問題意識を高めるには道徳授業だけでなく，幅広く学級経営を中心とした道徳教育の中で，様々な機会をとらえて日常的に児童と共に考える姿勢が最も重要であるという意識の中で研究を進めた。

その他特記事項

児童の問題意識を高める道徳授業の工夫改善

南中野道徳授業研究会

１　研究主題設定の理由

学習指導要領改訂から３年が経過した。道徳の時間が「特別の教科　道徳」（以下，道徳科）として実施されて４年目になる。検定教科書も配布され，全国の小学校での道徳の教材不足も解消されてきた。どの学校でもある一定レベル以上の道徳授業が実施されるようになったことは喜ばしいことである。一方，評価を記載することを意識するあまり，ワークシートを連発するようなまるで評価のための授業であること，教科書の指導書をなぞるような授業であることも少なくない。また，問題解決的な学習を適切に取り入れるということも示されているが，この問題解決的な学習を意識するあまり，設定した問題が児童のものになっていなかったり，児童の思考と大きなずれがあったりすることも散見される。また，手段である問題解決的な学習の実施そのものを目標としているような道徳授業の特質を違えてしまうような授業も残念であるが存在する。

道徳授業の特質とは，道徳的価値の理解をもとに，自分を見つめ，多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習である。その際，児童自身が問題意識をもつことが重要である。

道徳授業における児童の問題意識を児童が物ごとを自分のこととして考える思考ととらえた。例えば，道徳の授業を楽しみにしている。道徳授業で扱う教材の人物に自分を重ねて考えている。自己の生活場面を思い浮かべて考えている。自分と関わりのある社会について考えている等の児童の姿である。

この児童の問題意識を高めることで，道徳授業の特質を踏まえたよりよい授業への工夫改善を目指すべく，研究主題を「児童の問題意識を高める道徳授業の工夫改善」とし，中野区の南中野地域の道徳教育，道徳授業の充実を志す仲間で研究を進めた。

２　問題意識を高める実践事例

昨年度までの研究を踏まえ，生活や体験，共通の題材や教材から問題意識をもたせる学習展開のために，まず児童の立場に立って，問題意識を高める実践事例を共有した。

（１）　授業の予告
（２）　オリエンテーションの工夫
（３）　アンケートの工夫
（４）　導入での工夫
（５）　複数時間扱いの工夫　連続時間扱いの工夫
（６）　教材を活用した事例　等

３　授業実践事例（第５学年）

（１）　授業概要

①主題名【Ｃ：国際理解】人の心は皆同じ～ｇ国はちがっても

②ねらいと教材

ねらい：難破船で遭難した出会ったこともない外国人（トルコ人）を自ら助ける村の心の内を考えることで，外国の方々と分け隔て無く接しようとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

教材：一人でも多くの者を救え！（自作教材）

③教材の概要

明治２３年，トルコの使節団が日本に来航し，およそ３ヶ月間，日本に滞在し，友好を深めた。母国に帰る途中，和歌山県沖の大島付近で台風の直撃に合い，遭難してしまう。

和歌山県の紀伊大島では，難破した船から避難してくる外国人（トルコ人）を言葉も分からない中，次々と受け入れる。当時の人々にとっては，外国人は奇異に映ったに違いない。

そんな中，村人たちは村全体で力を合わせて，ずぶぬれで裸同然，血の気が無く，怪我をしているということで，分け隔て無く，火をたき，民家やお寺に救護所を設けて介護した。

非常時に飼っていたにわとりまで提供し，体が冷え切り，生死をさまよう人々は，布団に寝かせ，下帯ひとつでかわるがわるだき暖めることをして，命を救おうとした。

④展開の大要

＜導入＞

○自分の好きな国をイメージしながら，問題意識をもつ。

※トルコでは，多くの人が日本を第１位に挙げることを伝え，問題意識をもたせる。

◇みなさんの好きな世界の国はどの国ですか。実はトルコでは一番好きな国に日本を挙げている人が圧倒的に多いのです。それは，どんなことからだと思いますか。今日，みんなで考えたら分かるかもしれません。

＜展開＞

○教材「一人でも多くの者を救え！」の範読を聞き，村人の気持ちについて話し合う。

※場面絵を示しながら教材提示する。

１　全身ずぶぬれの男達を見た時，滝沢技師は何を思ったでしょう。

※物語のあらすじを押さえながら，資料にかかわる地図，絵を提示し，発問する。

２　半鐘を叩き続けた友吉の心の中はどんなだったでしょう。

※遭難者を助けたいという思いを，子どもたちそれぞれの言葉で多様に引き出す。

③「人の真心に国境はない」と言った沖村長の言葉にはどんな思いが込められているでしょう。

※あらゆる村人たちが遭難者を助けたことを確認して，発問する。

〇自分を振り返る。

※中心発問の後，導入で高めた問題意識について触れてから発問をする。

◇トルコの多くの人が日本を一番好きな国を挙げるその意味が分かりましたか。

※「これまで見ず知らずの外国人と分け隔てなく接してきたか」を振り返り，その時の体験・経験を話し合う。

◇外国の人と出会って，どのように接しましたか。当たり前のように接した経験はありますか。

＜終末＞

〇日本に助けられたことを１００年以上経っても忘れていないトルコの話を聞く。

※１９８５年のイラン･イラク戦争の際，トルコ航空機がイランに入り，日本人を救出した新聞記事を見せる。

⑤評価

〇沖村長が言葉に込めた思いや願い，村人の心の内について多面的・多角的に考えている学習状況を把握する。（中心発問）

〇外国の方々との自分の接し方について自分を振り返って考えている学習状況を把握する。（展開後段）

（２）考察

① 問題意識の醸成にかかわること

統計資料を活用し，トルコの人が日本を好きな国の第１位に挙げていることを伝えた。その後，「それはどうしてだと思う。今日のお話を通してみんなで考えていこう。」と投げかけることで問題意識を大いに高めることができた。そして，教材を通した話し合いを通して，振り返りの前にこの問題についての思考を確認するとたくさんの児童がより深く考えていることを感じ取ることができた。

・昔からのお世話になった国を覚えている。
・人の命を救うことはどの国でも同じなんだ。
・このことがトルコにとっても大きなことだったんだと思う。
・わたしたちにもきっとそういうことがあると思う。本授業ではこの交流には大きく時間をかけず，事後に考えたことも共有することにした。

終末で紹介した新聞記事もこの問題意識をもった学習に充足感をもたせる上で，大変有効であった。道徳授業に子どもたちの問題意識をもたせていくことは，道徳授業の工夫改善に直結する。

②道徳授業の充実にかかわること

本資料は，エルトウールル号について興味をもった指導者が自作した資料である。自作の過程で，図書館指導員の協力を得，絵本「救出　日本・トルコ友情のドラマ」が紹介され，道徳教育推進教師による内容項目の精査を経て，学年会で相談しながら資料の吟味を図ったものである。さらに，学年で次々に授業実践され，その実践に基づいて，資料の改作，及び展開の大要が検討される中，よりよい授業づくりができ，年間指導計画の工夫改善にもつながっていった。道徳指導の工夫改善にかかわる準備からの協力指導体制の充実が本授業を創造した。

本授業は，総合的な学習の時間「トルコの人々との交流」の準備過程の中で設定されている。子どもたちは，トルコの人たちに分かりやすいように紹介を考えたり，どうしたら喜んでもらえるかを考えたりしながら準備する間で，本時の学習を進めていた。学習後，トルコと日本の良好な関係の意味について考えた上で，「よりよい交流をしたい」という感想をもつ児童が多く，このことは交流学習に中でも継続して話題になっていた。

学級には，トルコ籍の児童もおり，子どもたちは，その子への理解を深めている最中でもあり，学級経営との関連も意識することができた。

さらに，関連性や継続性についてもよりその効用を考えて，交流準備前の設定や交流後の設定についての視点，そして，学級経営上の配慮の視点，道徳授業にトルコの方をお招きする等，人材・施設活用の視点での検証も必要である。

４　道徳談義

本研究会は道徳授業，道徳教育の充実に関し、志を同じにする同行の仲間である。時に触れ、道徳授業、道徳教育に対する思いや願いを語り合ってきた。それは自身の道徳指導力向上もあるが、学校全体や地域の道徳指導力向上にあるからである。「道徳談義」として様々な立場、経験を有する道徳に対する志を同じにする仲間が日常的に語り合う中で、「道徳授業における問題意識を高めるとは」というテーマを「Ｑ＆Ａ」としてまとめた。

「道徳授業における問題意識を高めるとは」Ｑ＆Ａ

Ｑ：道徳授業での問題意識とは教科で言う「めあて」のようなものですか？
Ａ：子どもがこだわって考える、そして考えたいポイントのようなものだと思います。「子どもにとって身近で切実な問題」になったらとてもいいです。そして、子どもが道徳授業を楽しみにするというようなことは前提というか、大事な視点だと思います。

Ｑ：各教科の「めあて」のように黒板に書いた方がいいですか？
Ａ：書いて効果的なこともあるし、書いても全く触れない授業もあるし、板書して提示することでそのことにとらわれすぎてしまうこともあるのではないでしょうか。

Ｑ：主題名を示すのですか？

Ａ：主題名を板書して授業を進めるようなことも授業では見られます。が、安易に主題名を出さない方がいいという考えもあります。本当によい主題名は、子どもたちが話し合っている中で授業中に焦点化されて児童の発言に表れてくることもあります。

Ｑ：板書で示さない方法もありますか？
Ａ：当然あります。前述のように授業の中で子どもの言葉で表れてくることも結構あります。また、小黒板などに書いておいて、展開後段で再度提示していくようなこともあるでしょう。要するに児童に主題名を提示したほうがいいかどうか、それは道徳授業のねらい達成と密接に関係していると考えます。

Ｑ：どうしたら問題意識をもたせられますか？
Ａ：まずは自分の学級の道徳授業の充実を図ることです。そして学級経営の中で道徳授業に対する子どもたちの思いや願いを汲み取っておくことだと思います。そこに児童が考えたいと思っていることは潜んでいるのではないでしょうか。

Ｑ：１単位時間の授業では無理ですか？
Ａ：１時間の中では導入で考えることが多いと思います。導入の問いかけから子どもとやりとりして問題をつくる例や教材を読んで「どんなことを考えたいか」と問う例があります。どちらもポイントはその問題が子どものものになってるかどうかです。考えたいと思っているかどうかです。ですから、子どもたちにどの言葉をどのように問いかけ、何を取り上げ、どう共有するかはとても大事だと思います。

Ｑ：問題解決的な学習にするということですか？
Ａ：一概にそうとは言えません。子どもが考えたいなあとか、考えてみようと思うことが大切だと思います。「問題意識をもたせる」ぐらいに幅広く緩く捉えていた方が大人も子どももいいと思います。問題解決的な学習は「手段」であり、「目的」ではありません。子どもファーストで「楽しい」道徳授業にしたいですね。

Ｑ：授業の導入で投げかければいいのでしょうか？アンケートを活用した事例を多く見ますが、どうでしょう？
Ａ：効果的だと思います。既にアンケートを実施する段階で学級経営とのつながりを十分に考えていくような姿勢が大事だと思います。けれども、いつもアンケートという訳にはいきませんね。無理していては「楽しく」ならないと思います。

Ｑ：無理なく問題意識をもたせるのに、１単位時間ではないこともありますか？
Ａ：あります。２時間扱いもあるし、５時間のくくりをつくっているような例もあります。先ほども触れましたが、学級経営の中でのこともとても大事だと思います。

Ｑ：授業だけじゃないんですね。どんな具体例がありますか？
Ａ：①まずは、来週の道徳授業の予告をするような例
②オリエンテーションの記録を活用するような例
③５時間連続のシリーズ扱いにして「自分のよさを見つめよう」というような例

④「Ｄ：生命の尊さ」を年間で３回扱い、前時のことを触れていくような例
⑤教材の登場人物を紹介しながら問いかけていくような例　などです。

Ｑ：どのように取り組んでいったらいいでしょう？
Ａ：前述のようなことは学級経営上の道徳教育です。道徳授業経営とも言えるかもしれません。その授業の前から子どもが既に「問題」を意識するので大事だと思います。
①まずは次週の道徳授業の予告をしてみましょう。なかなか道徳授業の予告をすることはまだまだ少ないです。例えば、授業の最後に次の学習の登場人物を紹介する等です。来週の登場人物を紹介し、「次はおおかみ君が出てくるよ。」というようなことに子どもはわくわくすると思います。
②道徳のオリエンテーションを実施し、学級で考えたい、大切にしたい内容項目を共有しておくようなこともあります。「今日はみんなが考えてみたいと思っていたナンバー１『Ａ：正直、誠実』について考えようね。」というような投げかけはあり得ます。
③子どもたちが教科書に日常的に触れ、子どもが興味をもった教材をつかんでおくことは大事です。「先生、このお話いつやるの？みんなで考えたいよ。」というような声が届くようにしておくような学級づくりは心を開く意味でも重要です。
④時には、前日に予告し、教材を配布し、宿題で読んでおいてもらうことも効果的な場合があります。そして、その感想から入ることもあるでしょう。
道徳授業で「問題意識をもつ」いうことには、無限の可能性があるのではないでしょうか。そしてそれは道徳授業が楽しくなる可能性を秘めていると考えます。

Ｑ：要するに問題意識をもたせることや問題解決的な学習を取り入れることについて、どんなことが大切なのでしょう。
Ａ：その問題が子どものものになっているかどうかが最も大事です。だから、指導者として大切にする姿勢は「問題」＋「意識をもたせる」（高める）なのでしょう。その中で、子ども自身が「もつ」が最も大事だと思います。先ほども触れましたが、子ども自身が「問題意識をもつ」ことには無限の可能性があります。それが道徳授業のねらい達成に結び付くことを期待して道徳授業の実践を進めていきましょう。

５　成果と課題

学級経営を中心とした全教育活動の中で，道徳授業にかかわる問題意識の醸成を常に意識した実践から道徳授業の工夫改善を図ったことにより，道徳授業の特質を損なうことなく充実した授業が展開できた。子どもに問題意識をもたせる学習展開は，子どもが自ら進んで学習し，道徳的価値を自分のものにするために非常に有効であった。

「考える道徳，議論する道徳」というキャッチフレーズが独り歩きした中，現在は「討論しなければならない」というような誤解が若干収まっている状況と捉えている。しかし，本来，子ども自身がこの問題をみんなで考えたい，話し合いたいという「考えたい道徳，話し合いたい道徳」と思うようなことが大事だと考えている。

児童自身が問題意識を高めて臨む道徳授業には様々な可能性がある。今後も学級経営を中心とした全教育活動における道徳教育，そして毎週の道徳授業の実践の場面で強く意識していくことの有効性を更に検証していきたい。